久留米大学人間健康学部紀要，2022，6，25-34

報　告

# 久留米大学人間健康学部学生の入学動機による学びの実感と進路選択自己効力感の関連：1期生の入学時から卒業時の進路決定まで

浦上　萌[1)]・行實　鉄平[2)]・奥野　真由[2)]

本研究では，入学動機の特徴を用い，１期生の学びの実感について１年次と３年次の変化，就職活動と進路決定との関連について検討した。その結果，１年次の入学動機の特徴は専門性高群，期待高群，無目的群，未決定群の４つに分類され，学びの実感は期待高群の得点が高く，未決定群が最も低い得点となった。３年次になると，学びの実感は全体的に減少し，カリキュラム構成等に関わる課題がある可能性が示唆された。一方，進路選択の自己効力感に関しては，入学動機の特徴間で差は見られず，概ね良好で，就職活動と卒業後の進路についても大部分の学生が４年後期には決定していた。以上の結果を踏まえ，当該学部の教育課題として，学年が上がるにつれて学びの実感が減少しないように専門科目のあり方を見直し，専門性を構築して興味関心や学修を深めていくことの実感につなげていけるような教育を行う必要があることが考えられた。

**キーワード**：進学動機，学びの実感，卒業後の進路決定，就職活動，資格取得

# Relationship between the actual feeling of learning and self-efficacy regarding career decision by the motivation for admission: from the time of entrance to post-graduation career decision

**Moe URAGAMI, Teppei YUKIZANE, and Mayu OKUNO**

## はじめに

文医融合型の学際的な学部として2017年度に久留米大学に誕生した人間健康学部総合子ども学科とスポーツ医科学科は，2020年度に完成年度を迎えた。学部コンセプトとして「文医融合」が掲げられ，文系学部でありながら医学部との連携・協働による独自のカリキュラムを設定し，学生に幅広い知識と技術を学修してもらえる環境を提供することで，保育や体育・スポーツ分野における専門性の高い人材育成を目指した教育が行われている。

その教育効果や学生の実感を可視化するために，2017年度の学部開設初年度より「学部教育研究プロジェクト」を４年間継続して展開してきた（行實・浦上，2021）。学部の１期生から４期生までを対象に，入学動機の分析や，クラスター分析における学生の分類（浦上ら，2019；行實ら，2019，2020；行實・浦上，2021），１期生の入学動機をもとにした期待と，学生生活を送る上での学びの実感のギャップをIPA（Importance-Performance Analysis）分析から明らかにしてきた（行實ら，2019）。

1）椙山女学園大学人間関係学部心理学科
2）久留米大学人間健康学部スポーツ医科学科

特に2020年度で卒業した１期生の４年間の動向において，入学動機から学びの実感の変化について明確にし，就職や進学などの進路決定までの経過を示すことは，今後のカリキュラム改革や進路選択指導等にも有益になると考えられる。よって，本研究では１期生の年次別の変化に着目する。

さらに本研究では，進路選択に対する自己効力感と進路決定との関連についても検討していく。浦上（1995）が開発した大学生の進路選択に対する自己効力感は，進路選択における計画力や選択力を包含した１因子構造の尺度であり，信頼性と妥当性も確認されている。この進路選択に対する自己効力感が高いほど積極的に就職活動を行う傾向が高いことも示されており（浦上，1996），両者の関連を検討することは進路選択指導にも示唆を与えるものになるであろう。

また，柴田・安住（2011）では，就職活動や進路決定状況と，上述の進路選択に対する自己効力感尺度（浦上，1995）との関連を検討しており，４年生で進路決定している者は，４年生の進路未決定群，３年生の就職活動前群よりも進路決定の自己効力感が高いことが示されている[注1]。柴田・安住（2011）のデータは３年生と４年生の横断データであるため，１年次の入学動機との関連が明らかになっていない。本研究では１期生の１年次から４年次までの追跡調査を行い，入学時点から進路決定までの軌跡について示すとともに，本学部の教育課題を明らかにしていきたい。

## 目　的

本研究では，人間健康学部の１期生を対象として，入学動機と進路選択に対する自己効力感，並びに就職活動と進路決定との関連を明らかにするために２つの目的を設定した。

第一に，１年次の入学動機に基づくクラスター分析の結果と入学後の学びの実感との関連，並びに進路選択を行う３年次の自己効力感との関連を検討した（研究１）。第二に，１年次の入学動機に基づくクラスター分析の結果と４年次の就職活動・進路決定との関連を検討した（研究２）。

### 研究１

#### 方法

##### 1）分析対象者

人間健康学部１期生で１年次に入学動機および学びの実感に関する調査に回答した学生140名（総合子ども学科：54名，スポーツ医科学科：86名）のうち，３年次の調査にも参加した80名（総合子ども学科：31名，スポーツ医科学科：49名）を最終的な対象者とした。

##### 2）調査の方法

１年次（2017年度），３年次（2019年度）の前期終了頃（７月末～８月），授業の冒頭の時間を使用し，アンケート調査（無記名方式）を対面で実施した。その際，アンケート回答前に筆者らによる調査の趣旨，プライバシーの保護とデータの保管方法，自由参加で不利益防止の配慮等に関する倫理的配慮の説明を行った。また，各年次のデータをマッチングするために携帯電話の下４桁の番号を記述してもらうよう教示し，これにより個人が特定されることはないことを説明し，承諾が得られた学生に回答してもらった。なお，本研究は，久留米大学御井学舎倫理委員会による審査を受け，承認を得た上で調査を実施した。承認番号は順に，2017年度321，2019年度366であった。

### 3）分析の方法

まず，１年次の入学動機に基づくクラスター分析については，浦上ら（2019）において作成された入学動機項目（４因子24項目）の結果を用いた。４つの因子は，第１因子が「内的期待」（９項目，例「人生の視野を広げるため」「大学の設備が充実していたため」），第２因子が「外的期待」（６項目，例「高卒では嫌だから」「大卒の肩書がほしいため」），第３因子が「資格・専門性」（４項目，例「専門的な知識や技術を身につけるため」「興味のある分野を深く掘り下げるため」），第４因子が「無目的・漠然」（５項目，例「自分の成績にあっていたため」「自分の学力を考慮したため」）であった。各項目は，「全くそう思わない（１点）」，「そう思わない（２点）」，「どちらでもない（３点）」，「そう思う（４点）」，「とてもそう思う（５点）」のリッカート型５段階尺度評定を用いて測定され，その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で得点化された。４つの因子ごとにｚ得点を換算し，Ward 法によって分類された。クラスター分析の結果，第１クラスターは資格・専門性の得点が高い「専門性高群」，第２クラスターは内的期待と外的期待の得点が高い「期待高群」，第３クラスターは，無目的の得点が高い「無目的群」，第４クラスターは４つの因子，すべての得点が低い「未決定群」と命名した。分析対象者の各クラスターの人数は，専門性高群18人（22.50％），期待高群13人（16.25％），無目的群38人（47.50％），未決定群11人（13.75％）であった。

次に，入学後の実感については，行實ら（2019）と行實・浦上（2021）で使用された22項目を用いた。これらの項目は，先に示した入学動機の項目の中から期待内容に関連する項目について抽出し，そのワーディングの末尾を「～（でき）そうだ，～できている」といった表現に変更したものである。各項目は，「全くそう思わない（１点）」，「そう思わない（２点）」，「どちらでもない（３点）」，「そう思う（４点）」，「とてもそう思う（５点）」のリッカート型５段階尺度評定を用いて測定され，その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で得点化された。先述したクラスター別に各項目の平均値を算出し，１年次と３年次の変化を示した。

そして，３年次の進路選択に関する自己効力感については，浦上（1995）で使用された尺度30項目を用いて，自己効力感の得点を算出した。各項目は，「全く自信がない（１点）」，「あまり自信がない（２点）」，「少し自信がある（３点）」「非常に自信がある（４点）」のリッカート型４段階尺度評定を用いて測定され，その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で得点化された。

## 結果と考察

### 1）クラスター別の期待の実感得点の変遷

１年次のクラスター別に入学後の期待の実感の得点について図示した。図１は１年次前期終了時点の得点結果，図２は３年次前期終了時点の得点結果を示している。なお，行實・浦上（2020）において，学科別の学びの実感の変遷（図３や図４）では平均値のみが記されており，統計的な分析は行っていないため，本研究でも同様に平均値の数値から読み取れる結果を示す。

図１の１年次の入学後の期待の実感に関しては，多くの項目で期待高群の得点が最も高く，次に専門性高群，無目的群，そして未決定群の得点が最も低いことが明らかになった。期待高群に関しては，「2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている」「12. 自分に合った職業をみつけられそうだ」「18. 興味ある分野を深く掘り下げられている」「19. 希望している資格がとれそうだ」「20. 得意とすることを追求できている」の５つの項目が最も得点が高く（全て $M=4.64$），自分の興味関心のある専門性に関することや，資格取得について期待通りに学べている

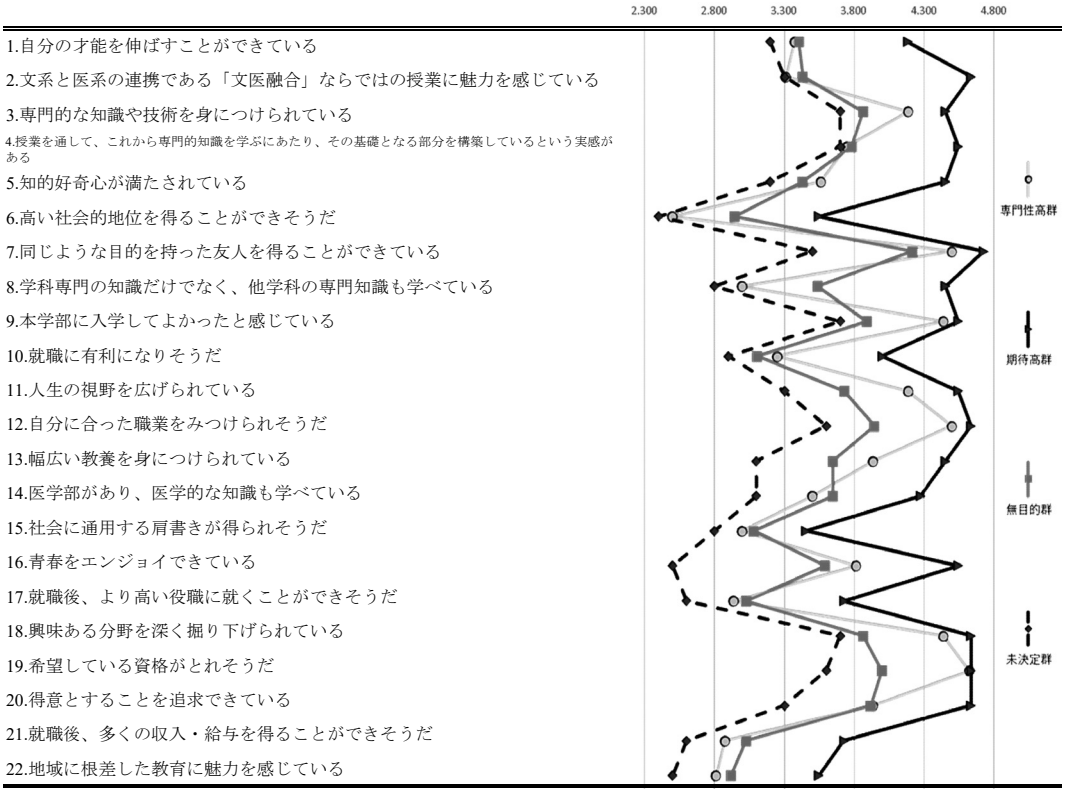


**図１　入学動機クラスター群別の1年次の学びの実感**

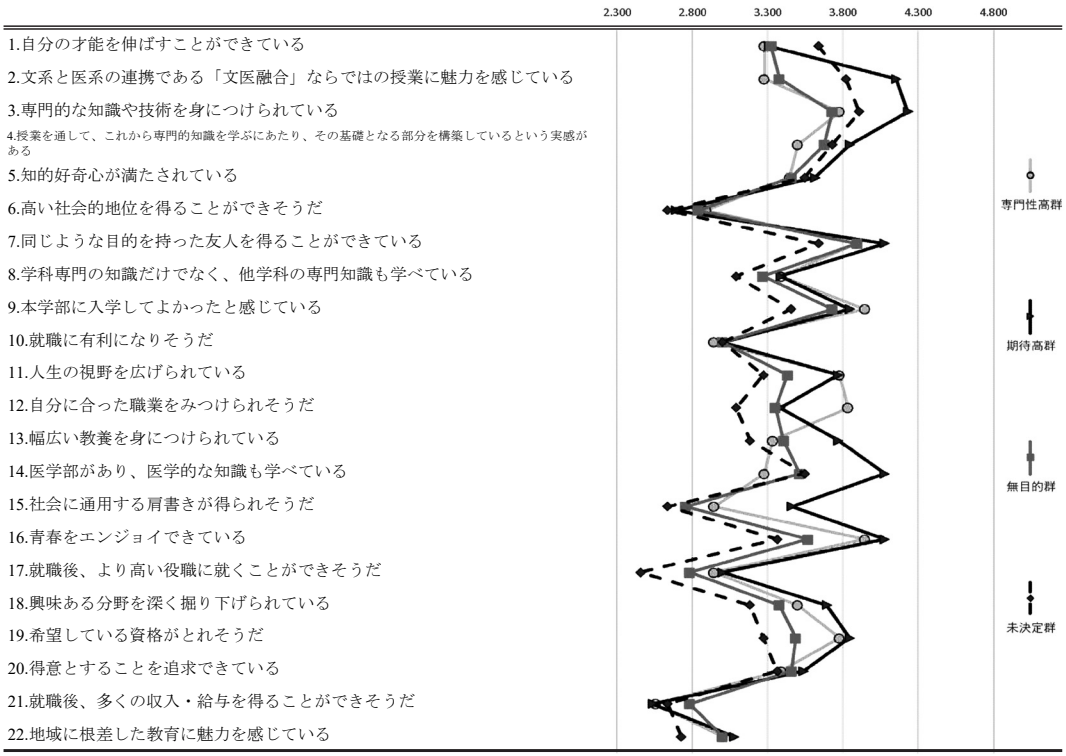


**図２　入学動機クラスター群別の３年次の学びの実感**

という実感が備わっていると感じる学生が多いことが示唆される。次いで全体を通して得点が高かった専門性高群に関しても，「19. 希望している資格がとれそうだ（$M=4.63$）」「12. 自分に合った職業をみつけられそうだ（$M=4.50$）」は特に高い点数であり，保育や体育・スポーツ分野における専門性の高い人材を育成するという学部カリキュラムの特徴として強調されている部分に強い学びの実感が持てていることが伺える。

一方で，未決定群に関しては，「6. 高い社会的地位を得ることができそうだ」の得点が最も低い結果となった（$M=2.40$）。この社会的地位の項目については他のクラスター群でも低い得点であり，クラスター群に関わらず，期待や関心がないことが示された。また，「16. 青春をエンジョイできている」「22. 地域に根差した教育に魅力を感じている」に関しても次いで低い結果となった（いずれも $M=2.50$）。特に「16」の項目については，大学生活も含めた生活全般に対する当時の学生自身の充実感や満足感に関わる項目であり，他のクラスター群が比較的高い得点であったにも関わらず低い傾向にあり，現状に満足していない状況が示唆される。同じく得点が低い傾向にあった無目的群に関しては，未決定群ほどではないものの，項目ごとの得点の変遷は「16」を除いて類似した特徴となった。無目的群の「16」の項目得点は，平均値が3.59となり，専門性高群の値（$M=3.81$）と近い値となっている。何か明確な目的はないものの，一定の楽しみや充実感は得られている可能性があると考えられる。

次に，図２の３年次前期終了時点の結果について概観する。１年次の得点と比較して，全体を通して減少傾向となっている。この傾向については，行實・浦上（2021）の中でも２年次，３年次と学年が上がるにつれて得点が低くなるが，４年次になると１年次の得点まで回復する項目が多くあると示されており，進路決定に悩んだり，自分の専門性について見直すタイミングと重なった結果である可能性もある。その中でも，期待高群に関しては，１年次と同様に他のクラスター群の得点よりも高い傾向は維持されたが，１年次ほどの差はない結果となっている。

また，クラスター群別に特徴をみていくと，期待高群は１年次から引き続き「2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている」の得点は高く（$M=4.15$），当初の期待通り，文医融合の学びを実感できていることが伺える。さらに期待高群と専門性高群の両方で「7. 同じような目的を持った友人を得ることができている」の得点が高く（順に，$M=4.08$，$M=3.89$），将来に対して類似した方向性を持つ仲間集団の中で，学生生活を過ごせていることが示唆される結果となった。

未決定群に関しては，１年次と同様に全体を通して他のクラスターよりも得点が低い傾向を示した。また，「1. 自分の才能を伸ばすことができている」に関しては他のクラスターの得点と比較しても高く，平均値3.64となった。「2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている」「3. 専門的な知識や技術を身につけられている」「4. 授業を通して，これから専門的知識を学ぶにあたり，その基礎となる部分を構築しているという実感がある」に関しても，期待高群に次いで２番目に高い得点となった（順に，$M=3.82$，$M=3.91$，$M=3.73$）。よって３年次になると，学部での学びに対して一定の充実感が得られている可能性も考えられた。

以上のように，１年次から３年次にかけて入学後の学びの実感は学年が上がるにつれて減少傾向になるが，学部のコンセプトである「文医融合」に関する項目は比較的高い得点傾向が維持されることが分かった。

### 2）クラスター別の進路選択に対する自己効力感得点

まず，進路選択に対する自己効力感尺度について，探索的因子分析（最尤法，回転なし）を行った。因子数は，固有値の減衰パターン（9.57，2.34，1.92…）となり，浦上（1995）で１因子構造であることも確認されていたことから１因子とした。しかし，「自分の将来の目標と，アルバイトなどでの経験を関連させて考えること」「今年の雇用傾向について，ある程度の見通しを持つこと」「一度進路を決定したならば，「正しかったのだろうか」と悩まないこと」「何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合，それに対処すること」の４項目において因子負荷量が .35未満であったため，これらの項目を除外し，再度，26項目について因子分析を行った最終的な結果を表１に示した。なお，クロンバックα係数は .92と十分に高い値となり，因子内の同一性も確認された。

**表１　進路選択に関する自己効力感の因子分析**

| 項　　目 | | α＝.92<br>因子負荷量 |
|---|---|---|
| ［Q26］ | 将来どのような生活をしたいか，はっきりさせること | .79 |
| ［Q23］ | 自分の将来設計にあった職業を探すこと | .75 |
| ［Q28］ | 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと | .72 |
| ［Q29］ | 卒業後さらに，大学，大学院や専門学校に行くことが必要なのかどうか決定すること | .67 |
| ［Q20］ | 両親や友達が勧める職業であっても，自分の適性や能力にあっていないと感じるものであれば断ること | .65 |
| ［Q30］ | 望んでいた職業が，自分の考えていたものと異なっていた場合，もう一度検討しなおすこと | .65 |
| ［Q21］ | いくつかの職業に，興味を持っていること | .61 |
| ［Q16］ | 自分の才能を，最も生かせると思う職業的分野を決めること | .61 |
| ［Q11］ | 自分の理想の仕事を思い浮かべること | .61 |
| ［Q24］ | 就職時の面接でうまく対応すること | .60 |
| ［Q７］ | 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと | .60 |
| ［Q14］ | 将来のために，在学中にやっておくべきことの計画を立てること | .58 |
| ［Q18］ | 現在考えているいくつかの職業のなかから，一つの職業に絞り込むこと | .57 |
| ［Q13］ | 就職したい産業分野が，先行き不安定であると分かった場合，それに対処すること | .56 |
| ［Q27］ | 自分の職業選択に必要な情報を得るために，新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること | .56 |
| ［Q２］ | 自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること | .56 |
| ［Q17］ | 自分の興味を持っている分野で働いている人と話す機会を持つこと | .55 |
| ［Q12］ | ある職業についている人々の年間所得について知ること | .52 |
| ［Q６］ | 人間相手の仕事か，情報相手の仕事か，どちらが自分に適しているか決めること | .51 |
| ［Q15］ | 欲求不満を感じても，自分の勉強または仕事の成就まで粘り強く続けること | .50 |
| ［Q１］ | 自分の能力を正確に評価すること | .47 |
| ［Q９］ | 将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること | .45 |
| ［Q10］ | 本当に好きな職業に進むために，両親と話し合いをすること | .42 |
| ［Q４］ | 5年先の目標を設定し，それにしたがって計画を立てること | .41 |
| ［Q25］ | 学校の就職キャリア支援課や職業安定所を探し，利用すること | .40 |
| ［Q５］ | もし望んでいた職業に就けなかった場合，それにうまく対処すること | .40 |
| 削除した項目 | | |
| ［Q19］ | 自分の将来の目標と，アルバイトなどでの経験を関連させて考えること | |
| ［Q22］ | 今年の雇用傾向について，ある程度の見通しを持つこと | |
| ［Q３］ | 一度進路を決定したならば，「正しかったのだろうか」と悩まないこと | |
| ［Q８］ | 何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合，それに対処すること | |

次に，進路選択に関する自己効力感について26項目の平均値を算出した結果（表２），専門性高群（$N=18$，$M=2.66$，$SD=.41$），期待高群（$N=12$，$M=2.80$，$SD=.39$），無目的群（$N=35$，$M=2.65$，$SD=.27$），未決定群（$N=11$，$M=2.50$，$SD=.64$）となった[注2]。１要因の分散分析を行った結果，１年次の入学動機のクラスター群による主効果は有意ではなかった（$F(3,72)=1.08$，$p=.36$）。よって１年次の入学動機の特徴により，進路選択に関する自己効力感の得点に差はなく，この得点差は入学動機の特徴に起因していないということが分かった。よって学生生活を送る中で，入学時に無目的群や未決定群であったとしても，進路選択に関しては前向きに選択する方向性に向かう可能性もありうると考えられる。

**表２　入学動機クラスター別の進路選択に関する自己肯定感得点**

| | | 進路選択に関する自己肯定感の得点 | | | 分散分析の結果 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | *N* | *M* | *SD* | |
| 入学動機のクラスター | 専門性高群 | 18 | 2.66 | 0.41 | $F(3,72)=1.08$，$p=.36$ |
| | 期待高群 | 12 | 2.80 | 0.39 | |
| | 無目的群 | 35 | 2.65 | 0.27 | |
| | 未決定群 | 11 | 2.50 | 0.64 | |

**研究２**

研究１では，入学動機のクラスター群と学びの実感に関しては，１年次３年次ともに関連がみられた結果になったものの，進路選択の自己効力感に関しては明確な関連が見られなかった。研究２では，１年次の入学動機のクラスター分析の結果と４年次の就職活動・進路決定との関連を示す。

**方法**

**1）分析対象者**

人間健康学部１期生で１年次に入学動機および学びの実感に関する調査に回答した学生140名（総合子ども学科：54名，スポーツ医科学科：86名）のうち，４年次の卒業前の調査にも参加した53名（総合子ども学科：29名，スポーツ医科学科：24名）を最終的な対象者とした。

**2）調査の方法**

１年次（2017年度）のデータは研究１と同様である。４年次（2020年度）のデータについては，2020年12月から１月末に Google Forms による Web 調査で回答を求めた。倫理的配慮等は研究１と同様である。本調査に関しても久留米大学御井学舎倫理委員会による審査を受け，承認を得た上で調査を実施した。１年次は研究１と同様，４年次は承認番号412であった。

**3）分析の方法**

研究１と同様のクラスター分析の結果を用い，入学動機の特徴と就職活動との関連を検討した。

就職活動・進路決定については，柴田・安住（2011）を参照した。就職活動に関しては，「就職活動を行いましたか？または行っていますか？」という質問に対して「（過去に）活動した」「（現在）活動している」「活動していない」のいずれかを選択させ，入学動機のクラスター分析の結果との関連をクロス表で検討した。卒業後の進路に関しては，「卒業後の進路が決定していますか？」という

質問に対して「決定」「未決定」のいずれかを選択させ，入学動機のクラスター分析の結果との関連をクロス表で検討した。資格取得に対しては本学で取得する資格について選択してもらい，１つでも資格を取得する場合は「資格取得あり」，資格取得がない場合は「資格取得なし」とラベル付けし，入学動機のクラスター分析の結果との関連をクロス表で検討した。

## 結果と考察

まず，入学動機のクラスター群と就職活動の有無についてクロス表を作成した（表３）。データ取得日が４年次の終盤ということもあり，クラスター群に関わらず「過去に就職活動をした」の割合が最も高い結果となった。53名中45名（約85％）が就職活動をしたと回答しており，卒業後の進路選択に向けて多くの学生が就職活動を行ったことが伺える。

次に，入学動機のクラスター群と卒業後の進路決定の有無についてクロス表を作成した（表４）。進路決定に関しても，53名中47名（約89％）の学生が進路決定している結果となり，入学当初に無目的群や未決定群であった学生でも卒業後の進路決定をしている学生が多いことが明らかとなった。

最後に，入学動機のクラスター群と資格取得の有無についてクロス表を作成した（表５）。資格取得に関しては53名中39名（約74％）の学生が何らかの資格を取得している結果となった。入学動機のクラスター群別に資格取得の割合をみると，専門性高群と期待高群は，80％以上の学生が資格取得をしているが，無目的群と未決定群は60％程度にとどまる結果となった。専門性高群，期待高群

**表３　入学動機のクラスター群と就職活動のクロス表**

| | | 就職活動 | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 過去 | 現在 | 無し | 合計 |
| 入学動機のクラスター群 | 専門性高群 | 16 | 0 | 1 | 17 |
| | 期待高群 | 8 | 0 | 3 | 11 |
| | 無目的群 | 17 | 1 | 2 | 20 |
| | 未決定群 | 4 | 1 | 0 | 5 |
| | 合計 | 45 | 2 | 6 | 53 |

※過去は「過去に就職活動した」，現在は「現在就職活動している」，無しは「活動していない」を指す

**表４　入学動機のクラスター群と進路決定のクロス表**

| | | 進路決定 | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 決定 | 未決定 | 合計 |
| 入学動機のクラスター群 | 専門性高群 | 16 | 1 | 17 |
| | 期待高群 | 11 | 0 | 11 |
| | 無目的群 | 17 | 3 | 20 |
| | 未決定群 | 3 | 2 | 5 |
| | 合計 | 47 | 6 | 53 |

**表５　入学動機のクラスター群と資格取得のクロス表**

| | | 資格取得 | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 有り | 無し | 合計 |
| 入学動機のクラスター群 | 専門性高群 | 14 | 3 | 17 |
| | 期待高群 | 9 | 2 | 11 |
| | 無目的群 | 13 | 7 | 20 |
| | 未決定群 | 3 | 2 | 5 |
| | 合計 | 39 | 14 | 53 |

に関しては，入学当初から資格取得という目標を明確に持って４年間学習している者も多いと考えられるため，その目標を維持した学生が大部分であった結果と解釈できる。

対象となるデータ数が少ないため，参考程度の解釈にはなるが，就職活動と進路決定，ならびに資格取得に関しては，概ね良好な結果となり，卒業後の将来像を見据えた学習や活動ができた学生が多いと考えることができる。一方で，データ数が少ないことは課題であるため，引き続き追跡調査を行うことで，今回明らかにできなかった就職や進路選択に課題がある学生に対するサポートを検討していく必要がある。

## 総　括

本研究では，１期生の学びの実感と卒業の進路選択の動向をデータで示すことで，４年間の学生生活の実態を確認した。具体的には，第一に，１年次の入学動機に基づくクラスター分析の結果と入学後の学びの実感との関連，並びに進路選択を行う３年次の自己効力感との関連を検討し，第二に，１年次の入学動機に基づくクラスター分析の結果と４年次の就職活動・進路決定との関連を検討した。それらの結果を踏まえ，本学部の教育課題について述べていく。

第一に，入学後の学びの実感について１年次から３年次にかけて全体的に得点が減少する傾向にある点である。特に，期待高群と専門性高群に関しては，いずれの項目に関しても，１年次時点では比較的高い得点であったにも関わらず，３年次にはそれが維持されず，減少に転じていた。特に，学部カリキュラムの特色である「専門的な知識や技術を身につけられている」について，学年が上がるにつれて専門科目が増加する一方で学びの実感は減少の傾向であった。授業として学んではいるが，授業内容の難易度の適正，他の授業との関連，授業数等，カリキュラム上の問題で学生の学びの実感にはつながっていない可能性もある。学生に聞き取り調査等を行い，専門科目のあり方の確認と見直しが今後の課題になると考えられる。

第二に，進路選択の自己効力感については概ね良好で，最終的に進路選択の決定や資格取得を達成できた学生も多かった。本学部の特徴として，資格取得に対する学びと卒業後の進路が比較的結びつきやすい点が今回の結果につながった可能性もある。また，学部のコンセプトである「文医融合」に関する学びの実感の得点が１年次と３年次の両方で高い得点傾向であったが，学部のコンセプトに基づくカリキュラムの学びを通して専門性を身につけられているという成果として実感でき，それが資格取得や就職に直結することも本学部の強みとして捉えられるだろう。

一方で，第一の課題との関連を考えると，資格取得と卒業後の進路選択は着実に行ったが，それに伴う学びの実感が３年次時点ではやや低い傾向であったということになる。３年次は就職活動の開始や進路選択を具体的に考え始める時期になり，学生自身も自分の将来像について悩むことが多くなる。本学部は，両学科とも取得できる資格の専門性が高い一方で，その専門性と自分の特性とのマッチング，さらには卒業後の就職先として資格に関わる職業を選択することに迷う学生もいる。そのような学生に対して，教養など基礎学力を身につけた上で専門性を構築していくことの意義を伝え，自分の興味関心や学修を深めていくことの実感につなげていけるような教育を行う必要があるだろう。

本研究の結果から，今後の教育課題について述べてきたが，２期生以降の学生についてもその実態を追跡し，データ数を増やすことでより細かな課題も明らかになる可能性がある。また，学びの

実感については，インタビューなどを通して学生がどのような点に大学での学びに困難さを感じているのか，明らかにする必要があるだろう。

## 注

1．柴田・安住（2011）の調査時期は，2003年９～10月で集団調査法と委託留め置き法を併用して実施されたものであった。調査者参加者の内訳は，４年生で進路が決定している進路決定群は140名，進路が未決定である進路未決定群は92名，就職活動開始前の３年生（就職活動開始前群）は284名であった。
2．進路選択に関する自己効力感尺度のデータは，４人の回答に一部未回答があったためリストワイズ法により削除されたデータ（76名分）を使用している。

## 文献

柴田由己・安住伸子（2011）女子大学生の進路選択に対する自己効力と進路探索行動：進路選択過程としての就職活動に着目して．キャリア教育研究，29，71-80.

浦上昌則（1995）学生の進路選択に対する自己効力に関する研究．名古屋大学教育学部紀要，42，115-126.

浦上昌則（1996）女子短大生の職業選択過程についての研究：進路選択に対する自己効力，就職活動，自己概念の関連から．教育心理学研究，44，195-203.

浦上萌・奥野真由・行實鉄平・野田耕・秦佳江・大橋充典（2019）大学進学動機と学部の独自性との関連：文医融合学部に所属する大学生に着目して．久留米大学人間健康学部紀要，1，1-10.

行實鉄平・浦上萌・奥野真由・大橋充典・野田耕・秦佳江（2019）学生による新設学部への期待と実感：Importance-Performance Analysis を用いて．久留米大学人間健康学部紀要，1，27-39.

行實鉄平・浦上萌・奥野真由・大橋充典・野田耕・秦佳江（2020）人間健康学部の特徴に対する学生の期待と実感：１期生と２期生における比較．久留米大学人間健康学部紀要，2，35-51.

行實鉄平・浦上萌（2021）久留米大学人間健康学部学生の入学動機と学びの実感からみる「文医融合」教育の課題，久留米大学人間健康学部紀要．3，45-57.

## 付記

本研究は，令和２（2020）年度久留米大学副学長裁量研究教育支援「人間健康学部における教育評価および新規科目の開発」の助成を受け，調査実施した。また，「学部教育研究プロジェクト」のメンバー（鍋谷照，野田耕，大橋充典，秦佳江）には，本調査の実施にあたり，多大なるご協力をいただいた。

（2021.9.30. 受付　2021.11.18. 受理）